

社会科学部学生読書室のWINE 参加について

渡 邊 幸 弘（高田早苗記念研究図書館）

社会科学部学生読書室（以下、社会学読）では、本年4月1日より貸出・返却および検索システムを図書館で使用しているWINEシステム（以下、WINE）へ移行いたしましたので、報告がたがた経緯と現状を述べさせていただきます。

社会学読のシステムは、1996年4月よりそれまで使用してきた貸出システムを日本IBM社のLibVisionシステム（以下、LibVision）へ移行しました。もともと、学生読書室という性格上、他学部への貸出や閲覧は余り考慮されておらず、以前のシステムは、単に貸出返却のみをパソコンで行うだけの単純なものであり、目録データも検索できるようなものではありませんでした。このシステムを導入したことで、これまで利用者に不自由をかけていた蔵書の検索が可能になり、それまで3千数百冊程度だった年間の貸出冊数が2000年度末には8,684冊にまで増加しました。そして2000年度にリースが切れることを契機として、LibVisionのバージョンアップを行うか、WINEへ参加するかという検討を行いました。バージョンアップを行うとすると、蔵書の検索はWebで行うことができるようになりますが、これまで通り学読の蔵書は学読の検索画面からしか所蔵を知ることができないのに対して、WINEであれば、図書館の蔵書はもちろんのこと社会学読の蔵書も一覧できるようになり、利用者には非常に便利になります。予算面やこういった利便性を含めて次期図書館システムをどうするかを学部の先生方や図書館と検討した結果、学部としてWINEへの参加を決定しました。

WINEへ参加するに際しては以下のようなことが問題となりました。まず第一に、学読既存の蔵書をどのようにWINEへ反映するかということです。これまで図書館でデータを遡及するという場合、概ね現物を使った入力を行ってきましたが、社会学の蔵書は少ないとはいえ14号館という別の場所にあり、その運搬が問題となりました。また、

サービス開始を4月1日としていたため、現物からの入力では時間が足りませんでした。そこで、LibVisionから書誌・所蔵情報を抽出し、リストの形でWINEと照合するという方式が取られました。その結果、約40,000件のデータの中で約28,000件がHitデータとして登録され、残りの12,000件については、当初はダミー書誌（貸出のために便宜的に入力されたデータ）として登録されましたが、9月末現在で約半数の6,000件にまで減少しています。また、学読では極力書誌情報は扱わないという観点から、新刊書の入力については図書館にお願いし、所蔵データ付与のみを学読で行っています。第二に、WINEでは12桁の資料IDシールを使用しています。これに対して学読では7桁であり、そのままではWINEで使用している番号と一致してしまうものも出てくるため、12桁に変更することになりました。貼替えについては、利用頻度の高いものを中心に3月末まで行い、WINEへの参加以降は、未貼替えの資料は貸出の際に貼替え、時間があるときにそれ以外の図書への貼替え作業を行っています。第三に貸出等に関する規則の変更です。前にも記していますが、学読は学部生のための図書室です。よって、その規則も学部には則したのになっています。参加当初は、学読は社会学だけでしたが、法学部、教育学部が参加することもあり、共同利用を念頭にそれぞれの学部で検討を行い、9月以降3学部による共通規則による貸出が実現しました。これにより3学部と法研、教研、社会学研（および理工研）の学生が3室で貸出できることになりました。

WINEへの参加によって、これまで学読へ来なければ検索できなかった蔵書が図書館やコンピュータルームあるいは自宅からでも簡単に検索ができるようになり、前記3学部以外からも多くの利用者が社会学の学読へ来室するようになっており、毎月の入館者数も昨年より数百名ずつ増加しています。